

講演「スポーツ写真を撮り続けて」

2017年8月13日（日）

伊藤隆司

（何故、カメラマンに？）

（本当は、人一倍「先生」になりたかった）

（出雲一大社一出西 インターハイが終わると受験勉強と焼き物作り

残りの素材で、もう一冊クラスのアルバムを制作

入社した会社は、会社更生中）

1982年島根国体の指導者育成の為に設けられた島根県初の体育科、その2期生として
高校3年間陸上競技の長距離をやっていました。

出雲大社、日御碕、湊原、、、。

日本海に沈む夕日を見ながらひたすら走っていました。

競技成績は、インターハイの中国大会止まりでした。

高校3年の夏以降は、放課後の職員室で、何度も個別指導をしていただき受験勉強？
に明け暮れていました。

これから大学に行って、4年間自分はまた走り続けられるのか？

受験勉強をすればするほど自分の進む道はこの道なのか。

他の道は？

と自問自答の日々でした。

そんな時、卒業アルバム委員を引き受け、美術クラブに漠然と入りました。

そこで目にした榎原郁郎（まきはら いくろう）先生の湯のみ。

ドクロのような顔が4、5個付いた焼き物に感銘を受けました。

自分もこのような焼き物を作りたいと斐川出身の同級生に頼みこみ、出西窯の多々野
弘光（たたの ひろみつ）さんのところで作陶出来るようにしてもらいました。

受験勉強の合間、出雲一大社一出西（しゅっさい）を自転車でも何度も往復しました。

出西窯で焼き物を作りながら、「将来何になるか」と聞かれて、漠然と「カメラマン」
と言った瞬間、「カメラマンは辞めろ、うちには沢山カメラマンが取材に来るけれど食
えないぞ。それよりうちに来い。家の一軒は立つぞ」と言われていました。

この時のモノを自分自身で作るという事は、本当に素晴らしい事だと身をもっ
て感じました。

相変わらず、担任、顧問の先生、家族共にカメラマン志望には、絶対反対され続けて
いました。

そんな中、卒業アルバムで使用されなかった大量の写真を目の前にしながら、それなら自分で3年6組体育科だけの卒業アルバムをもう一冊作ろうと決めました。

問題ばかり起こす面倒なクラスでしたが、関わった先生方に自筆でメッセージをお願いしたところ皆さん快く引き受けていただきました。

それをクラス全員分のコピーをかけ、ホッチキスで止め仕上げました。

表紙は、書家でもあった美術の楨原先生より「独笑」のタイトルをいただき、巻頭は、石飛豊三校長先生に体育科にぴったりの「青春斗魂」を贈っていただきました。

人と人を結んで一つの物を創り出す喜びをこの時に深く感じ、その時は分かりませんでしたがこのアルバムを制作した事が、その後の自分の生き方を決めたとおもいます。

体育系でしたのでカメラマンでも編集者でも何でもなれると信じ、進路のことでは最後まで父とぶつかっていました。

当時、私はすべてのことは努力すれば必ず結果が付いてくると簡単に思っていました。現実を何も知らないわが子への愛情だったと思いますが、それを受け入れられず父には反発していました。

大学の受験の日は、受験票を握りしめながら土方のバイトをしていました。

出雲を立つ日、父に、「親には18年間育てた夢がある」と告げられ、写真の仕事をするまで出雲には帰らないと、心に決めたことを昨日の様に覚えています。

写真のことを何も知らずに上京しましたので、技術を身に着けるためにまず、学校に来たモデルさんにプロのカメラマンを片端から紹介してもらいました。

プロのカメラマンといわれる一人一人から技術を習得させていただき、平日は、舞台、ドキュメント、モデル撮影。週末は、スポーツと毎日撮影を行っていました。

1979年4月、ベースボールマガジン社に入社し、陸上競技マガジン編集部配属されました。

この会社は世界に類を見ないスポーツの総合出版会社でしたが、私が入社した時、原因は知る由もなく会社更生中でした。

写真を撮って雑誌も作る。素人の私が雑誌を自由に作らせていただいた事は、他の出版社では出来なかったと思います。

入社当時は徹夜続きで、スチールデスクの上の電話を枕に会社に泊まる。朝、掃除のおばちゃんに起こされるといった時代でした。

本当に沢山失敗をし、チャンスをいただき、そして許して頂きました。

ゴルフ、柔道、サッカー、ラグビー、スキー等と写真部員でもないのに雑誌の編集が終わると他の編集部の撮影を自らからどんどんしました。

(スポーツカメラマンとして生きる)

スポーツカメラマンというのは、どういふことをするのか？

(1980年 初箱根駅伝取材は、50 CC 原付バイク)

1980年正月、会社員1年目の箱根駅伝取材は、ラジオ中継しかなくカメラ車に乗り、先頭の集団だけ取材する報道が一般的だった頃です。それなら、原付バイクで箱根駅伝を追いかけ、トップから後続の学校まで、もれなく撮影し紙面で伝える。自分の中の企画だけは素晴らしかったですが、理想と現実はそう甘いものではありませんでした。

真っすぐ行けば必ず箱根のゴールへと到着するはずが、そうは行かず。

箱根の山に差し掛かった宮ノ下で、すでにバイクは悲鳴を上げ動かなくなり、押して箱根のゴールへ。

箱根の宿は、早稲田競走部と同じ。

「選手は、午前2時からすでに起き、箱根はすでに始まっている」と正月のお酒も入って氣勢を上げる早稲田のOB達。

翌日の箱根は雪になり、バイクを捨てるわけにもいかず、またしても箱根の山を押して下る羽目になりました。

写真は、小田原に入り先頭の日体大、パトカーを追い抜きゴールまでカーチェイスを繰り広げる暴走カメラマン。駆け出し1年目は、こんなのどかな箱根駅伝取材でした。

(1983年 22歳の新星カールルイスを追って)

1993年は、22歳の新星カールルイスが現れ、第1回ヘルシンキ世界陸上大会の企画を自分で考え、カールルイスをどこまでも追いかけてきました。

当時は海外取材などほとんどなく世界の出来事は、外国の通信社から写真と記事が届きその記事をもとに紙面を作る。そのような紙面作りでした。

日本においては本当のスポーツの姿は、読者に伝わらない。

私は、

「行きたい」

「自分のこの目で取材した」

でも、会社はNG。

「取材費がない」
では、
広告を取って、
編集タイアップ企画をつくり。
私は、そうして、現地へ行きました。

(1984年 商業五輪の先駆けロサンゼルス五輪)

出版社に入社し5年目の1984年、日本雑誌協会代表カメラマンとして五輪を取材。その時の取材証は、カメラではなく記者（ペン）のIDで写真を撮影しました。雑誌協会が借り上げた豪華な宿舎で、シベリア鉄道を経由してロスまで来た沢木耕太郎という作家と初めて会いました。その後、五輪の度に会うという関係が出来ました。

また、取材中に文芸春秋社の編集者から「凄い人」と紹介されたのが当時駆け出しだった？村上春樹さんでした。

東京から現地の様子を聞かせてくれと電話連絡がありました。ロスの五輪の興奮と村上さんの冷静さのギャップが印象深く残っています。

私は、このオリンピックの為に1年も前からロケハンをし、レンタカーを借り、モーターを予約し準備をしていました。

地図を片手に自転車、柔道、バレー、陸上、水泳、野球と、一人ロスのハイウエーを24時間走り回りました。

朝、昼、夜と競技を撮影し終わると、深夜、ロスの郊外にあるJALカーゴエリアへ毎日フィルムを届け、航空貨物でロスから成田へと送りました。

成田で緊急通関をし、バイク便で現像所へ送る。テスト無しの一発本番で現像を行い、各社の編集者が深夜集まり写真のセレクトし、各出版社の各媒体へと入稿されて行きました。

当時はまだフィルムカメラで、現在の様にオートフォーカス機能（AF）がなく、カメラマンの技術でピント合わせを行い露出を決めて撮影するという職人の世界でした。

例えば100m決勝には、世界から100人ほどのカメラマンが集まりゴールの瞬間を撮影しますが、横一線でゴールする姿は50人ほどになり、優勝者のガッツポーズとなると数名しか撮れていない状態でした。

右目でファインダーを見ながら左手でレンズのフォーカスリングを回し、ピントを確認しながら右人差し指でシャッターを切る。

50メートル付近で誰が勝つのかを見定め、80メートル付近でフレミングを再確認し、フィニッシュラインからガッツポーズまでフレミングに入れ、ピントを送り（回し）

をしながらシャッターを切る。

自分が冷静に自分の状態を俯瞰で眺められる「無我の境地」の状態でないと、写真は撮れません。

数秒間の極限の集中は、自己との闘いでした。

ですから、あの時はすごいレースでしたよね。とかよく言われますが、私は選手がどこで手を上げるのか、どこでジャンプするのか、目にピントが合っているのか、そんな精神状態でした。

隣のコースに誰がいたとか全く眼中になく、ただひたすらマクロ的な時空の中でシャッターを切っていました。

そのような過緊張から解放させたのが、オートフォーカス（AF）の精度が上がり、その場で画像がモニターで確認できるようになった 2000 年代からです。

以前は、スポーツカメラマンは 40 代で目が悪くなり、ピントが合わなくなり引退する。

このデジタルカメラの出現は、カメラマンにとって魔法の道具になったとも言えます。

現在は、レンズを向ければ写真が撮れる時代となり、いい写真が撮れないのはカメラマンのせいではなく、カメラのせいになっています。

（「天才は有限、努力は無限」世界最強マラソンランナー瀬古利彦）

私と瀬古利彦選手との出会いは、瀬古選手が早稲田大学 3 年生からだったと思います。

わたしが入社した 1979 年 4 月は、ボストンマラソンに優勝するなどの陸上界のスーパースターに上り詰めようとしていた時でした。

マラソンの絶頂期で、TV 放送すれば 50 パーセントという時代の幕開けでした。

このスーパースターを取材する為、報道機関は一斉に取材合戦を開始しました。

ところが、この前に立ちはだかったのが監督の中村清でした。

（1979 年—1985 年中村清監督との闘い

「来るなら来い〇〇〇〇」

今でも忘れもしません。最初に取材依頼の電話ですると、いきなり「来るなら来い。撃ち殺してやる」と電話口で言われました。その迫力にひるみそうになりながら、これで逃げたら一生取材できないと、意を決してすぐに東京千駄ヶ谷の監督の家に行きました。

インターフォンを押すなり監督が奥からライフル銃を片手に現れ、玄関先で銃を突

き付けられながら、2, 3時間延々と話が続きました。
今なら大変なことになりますが、当時はそんなことが許される時代であり、パワハラという言葉もありませんでした。
玄関先での話が終わると部屋の中に通され、仲間の一員として認められた瞬間でした。それからはビールを飲み、ステーキを喰えと。
それが陸軍士官学校の憲兵隊長式なのかわかりませんが、中村清は瀬古利彦をマスコミから完全に隔離し、取材は極力受けさせない。写真も撮らせない。秘密主義者でした。
では、他のメディアはどうするかというと、練習を行っている神宮外苑の周回コースの死角から盗み撮りし、コメントも取れないので創造記事を書く会社もありました。私は、相変わらず毎回練習前に監督に挨拶をし、取材の旨を伝える。監督は、ワンボックスの車の窓を少し開けて、約 2 時間の長い話をし、私は、直立不動でその話を聞きます。
瀬古選手の練習が終わり、ダウン練習に入るとようやく「サー撮っていいぞ」となりました。
それは「チーム瀬古」に入るならお前らも命がけでやれ、と毎回言われている様でした。
監督は、1985年5月25日新潟で溪流釣りの最中、死去してしまいました。

(1986年瀬古利彦を追って ロンドンーシカゴ)

丁度その頃から賞金レースが盛んに行われ始めました。
国内マラソンレースでは、海外選手には賞金が渡され、国内招待者には賞金は渡されない。日本陸上競技連盟は、国内レースには賞金レースなど存在しないというスタンスでした。白バイが先導し警察が警備する。公務員が賞金レースの先導、警備に駆り出されている中で賞金レースなどあり得ないというのがこの時代のスタンスでした。
会社を辞め、独立し、86年4月のロンドン、同年10月のシカゴ、87年のボストンマラソン、欧州遠征のスウェーデン、ロンドンと一人で瀬古を追いかけてきました。
海外では、アマチュアと言いながらカールルイスをはじめとする選手が賞金を貰って生活をし、アマチュアの祭典オリンピックに参加できる、矛盾した時代でした。
アマチュア選手と賞金。
日本選手は、賞金を取ったら「寄付する」ことが日本陸連の決まり事でした。国内、海外のマラソンに勝っても一銭ももらえないという状態でした。
瀬古さんにボストンマラソンに勝てば「選手が自分でお金が貰えるように」インタ

ビューに出てくれと説得し、ボストンマラソン前にインタビュー記事を掲載しました。

それが大問題となりました。

(1987年「お前は、瀬古をオリンピックに出させないつもりか」)

「陸連は、国税局と密かに話をつけてある。瀬古が海外で稼いだ賞金を個人の所得とせず、一旦陸連が預かり、必要経費を強化費として支給し引退後に稼いだ賞金は本人に渡す。それで国税と話がついているのに、直ちにこの雑誌の発行を差し止めなければ、お前を永久追放する」と陸連の法制委員長から言い渡されました。

「瀬古が賞金を受け取ったことになると、ソウルオリンピックに参加出来なくなる」「お前は、その責任が取れるか」と。

「ではカールルイスは、なぜ参加できるのですか」と。何度もこの弁護士事務所に通いつめ、アマチュアスポーツの中のプロ化の矛盾点を怒鳴りあいながら話し合いました。

私は、フリーのジャーナリストの端くれとして命を掛け、将来の日本陸上のランナーの為に訴えている。陸連はどちらの味方なのか？といった具合でした。

この時は、さすがに陸上とはこれで最後になると覚悟を決めていました。

しかしながら、運命は分からないものです。

出版社の輪転機は止まらず、雑誌は、無事に出版されました。

選手が獲得した賞金は選手本人に戻る仕組みがここで確立し、87年ボストンマラソンは、陸連が自ら認めた初の賞金レースとなりました。予想通りこのレースは、瀬古選手が優勝し、賞金、副賞、出場料を合わせて11万ドル相当を手にした記念すべきレースでした。

それから永久追放のはずの私はどうした訳か、1994年4月、日本陸連強化本部情報委員、98年4月に日本陸上競技連盟公認カメラマンに認定されました。

その後も瀬古選手を追い続け1988年ソウル五輪は、ピークが過ぎたとは言え優勝するかもしれないと、ゴールの正面を確保する為に前日夜からソウルのスタジアムに泊まり込みました。

一番いい正面の位置を確保し瀬古のゴールを待ちましたが、9位に終わりました。

「天才は有限、努力は無限」

瀬古利彦は、男子マラソンの最強のランナーでしたがオリンピックには縁がなかった、努力のランナーでした。

(1988年 栄光からの転落 目が血走っていたベンジョンソン)

突然ですが、

「ドーピング」とは、どういうものか皆さん知っていますか？

当時の日本の陸上のコーチに聞くと、ドーピングをどのようにするのか。

どうしたらドーピングを隠せるのか、誰も知りませんでした。

ドイツでは、陸上の専門コーチともなると大学できちんとドーピングの仕方、影響、倫理まで教えていました。

1988年ソウルオリンピックは、男子100mでカールルイスとベンジョンソンの対決が注目を浴びていました。

五輪直前のスイス、チューリッヒで9秒93の世界記録でジョンソンを破り好調のルイスを撮影したばかりでしたので、ここソウルでもルイスが優勝するものだと私は考えていました。

ソウル五輪の競技会場はオリンピック公園の中にあり私は、自転車を借りて取材をしていました。

ソウルで再会したジョンソンは、目が血走り、筋肉の張りが異彩を放っていました。

「おい、大丈夫か」自転車の荷台にベンジョンソンを乗せ、ウエート場に送り届けながら、後ろの荷台から伝わるその筋肉のすばらしさは、ほれぼれするものでした。

翌日の決勝は、ジョンソンが9秒79の世界新で優勝。

ようやく報われるたなど安堵したのも束の間、翌早朝ドーピング違反で金メダルはく奪され、ジョンソンはカナダに帰国しました。

ドーピングは飲むだけで力がつくのではなく、限りなく努力し鍛え上げた肉体をさらに鍛え上げることが出来るものです。

そして「目の前に世界一、世界記録」がちらつくと人間は、倫理の一線を越してしまうのでしょうか。

ドーピング違反とは言え肉体を極限まで鍛え上げたその人間の美しさは、忘れられません。

(1992年谷口浩美が私に発した第一声「途中こけちゃいました」)

91年の東京世界陸上で優勝した谷口浩美は、バルセロナ五輪の優勝候補筆頭でした。

バルセロナ五輪前に谷口君を阿蘇の合宿からバルセロナまで密着取材をしました。

オリンピック当日、谷口の優勝は不動でしたが、ゴールで待つ電光掲示板を眺めると谷口が転倒。これで谷口の優勝はなくなり日本人報道陣は森下広一の優勝に頼みを託し2位でゴールすると森下へ殺到しました。

谷口優勝を信じていた私は、すっかり気が抜け彼が帰ってくるのをじっとゴールで待ち続けました。

それでも、転倒し20キロからの驚異的な追い上げで8位に入賞。この追い上げは、世界のジャーナリストから賞賛されました。あの転倒さえなければ確実に金メダルダリ

ストでした。

神様のいたずらなのかもしれません。

本当に強い選手なのに、金メダルを取らしてもらえないランナーをたくさん見てきました。

オリンピックで勝つこと。マラソンで勝つことは、実力と運が重なり合わない限り絶対に取れないものです。

(1992年 他社と違う事 有森裕子に頼んで翌日同時刻にスタジアムへ)

女子マラソンの有森裕子が、日本女子として64年ぶりの銀メダルに輝いた。

「翌日、ゴール同時刻にスタジアムの天辺で写真を撮影させていただけないでしょうか」
ゴールしたばかりの有森に無理を承知でお願いすると、「一生の記念です。是非参加したい」と快諾をしてくれました。

TV, 新聞の取材が山のようにあるのに、それを断り一人でスタジアムまでやって来ました。彼女は、自分の意志をちゃんと持ち、判断し、行動が出来る。この時やはりただものではないと感じました。

次回アトランタでも同じ企画で撮影をさせてもらいましたが、世間の反響は今一つでした。この写真は、今、岡山の有森裕子実家の記念館に展示されています。

(1993年 サッカーの神様ジーコ)

お待たせしました。サッカーファンの方。これからは、いよいよサッカーです。

神様の声には主審も耳を傾ける。

我こそは「サッカーの神」といった93年開幕の一コマ。

選手がプロリーグ参加していることの充実感、スタジアム全体に新しいエネルギーに満ち溢れていました。

(1993年「100m年先まで記録を残す」肖像権管理会社の創設)

これまでのプロスポーツといえばプロ野球しかなく、しかしながら日本のプロ野球は「新聞のもの」であり、取材できるのは写真記者協会（新聞組合）のみ。撮影出来る場所は、写真記者協会のものであり、ホーム球団（チーム）であろうと自由に使用できるものではありませんでした。

日本人初のオリンピック金メダリスト織田幹雄（三段跳、1928年アムステルダム）の写真は、日本の競技団体には1枚も残っていませんでした。

ヨーロッパを取材に廻るたびに、100年前の写真がきちんと残され、その国の偉人達に敬意が払われていました。

1枚の写真が、スポーツは文化だという事を海外に行くたびに深く考えさせられました。これからスタートするJリーグは、①報道する門戸を広げる。②きちんと後世まで記録を残す。

選手の肖像権管理する会社、Jリーグフォト(現Jリーグマーケティング)を作りました。

100年先まで写真を残すための原資をどこから生み出すか。

私は、選手肖像、Jリーグの意匠を使った知的財産をビジネスにするこの設立に参画しました。

しかしながらJリーグは5月15日に開幕するも、その年の秋まで「決断の男川淵三郎チアマン」が決断出来ず、この会社は、設立されずじまいでした。

その間は、投げ出すわけにもいかず、無報酬にて全試合を撮影し続けました。

あの時投げ出していればJリーグもスポーツ文化もどうなったことやら。

この肖像権管理会社が今の日本のスポーツ報道、写真ビジネスの基本を作りました。「オフィシャルカメラマン」「包括肖像」「報道2次利用」など、アメリカのNHL,NFL,NBAなどを参考に日本に初のプロスポーツビジネスが根づきました。

早いもので、Jリーグは来年25周年を迎えます。

1998年フランスワールドカップ出場をかけたアジア最終予選。

1997年11月16日 マレーシア、ジョホールバル

この年にアジアサッカー連盟の公認カメラマンに認定され、オフィシャルカメラマンとしてこの試合を撮影しました。

日本は、初のワールドカップ出場に苦戦を強いられながらプレーオフまで駒を進めてきました。

2対2の同点。延長後半、中田英寿(なかだ ひでとし)がシュートしたボールを相手キーパーがはじいたところに詰めた岡野雅行(おかの まさゆき)がようやくシュートを決め、W杯10回目の挑戦で初出場の快挙を成し遂げました。

「ファインダーをのぞきながら早く決めろ!!」と叫んでいました。「また外すのでは～」と思った瞬間ようやく岡野が滑り込んで決め、日本に新たな世界の扉が開きました。

本当の闘いは試合が終わってからで当時はデジタルカメラの時代ではなく、地元の現像所を夜中に開けていただきネガフィルムを現像してもらいました。それから写真をセレクトし、ホテルの部屋から国際電話回線を確保し、数百万円するスーツケースほどの大きさの専用電送機で画像をスキャンし、電話回線で画像を送信し延々と日本の出版社に送り続けました。

1枚写真を送るのに30分は掛かった時代でした。

1枚の写真に30分の国際電話代。

日本に写真を電送し終えたのは外がすでに明るくなっていました。

記念すべき時は、余韻に浸る間もなく、いつもあわただしい。

(2002年初ゴールは、鈴木隆行)

FIFA（国際サッカー連盟）と大会組織委員会のオフィシャルカメラマンとして10名のカメラマンをコントロールしながら韓国と日本の両国を約一か月間飛びまわりました。大会報告書、ボランティア、地方自治体の報告書、開催都市への写真パネル製作などありとあらゆる撮影をしました。

日本の初ゴールは、是対外せない。必ず撮らなければいけない。

歴史を記録する。プレッシャーのかかった1枚がこれです。

イングランドから来たフーリンガンは、どこに行っても邪魔者扱い。しかしここ日本では、「外人さん」として客人扱いを受け、「毎回日本でワールドカップを開催して欲しい」。

クロアチアのサポーターは、「火星でワールドカップがあれば火星まで応援に行く」と本当のサッカーサポーターの凄さ、ワールドカップとは何かを教えてくださいました。

日本人が感じた「サッカー」、日韓のワールドカップを一か月に渡り隔々まで記録できたと自負しています。

この写真の一部は、JFAハウスのサッカーミュージアムB1階に残されています。

(2002年限定写真集は、選手が着たユニフォームと同じ)

2002部限定の写真集は、選手が着たユニフォームと同じアディダス製のユニフォーム布地を使用して作った限定の写真集です。

通し番号付きの1番は川淵三郎会長。6番は中田英寿に渡しました。

(2006年ドイツワールドカップ 日本対ブラジル中田英寿)

1988年のフランスワールドカップから日本サッカーの頂点に立っていた中田英寿（なかだ ひでとし）。

日本がブラジルに1対4で敗れ、2敗1引き分けで予選敗退したその日、

ドルトムントのスタジアムにいつまでも横になった中田は、ブラジル戦から10日後現役引退を表明。プロ選手として最後の試合となりました。

(2009年 日本ベーリンガーインゲルハイム -ドイツ ミュヘン)

広告代理店からサッカーの動きのある写真を撮れるカメラマンをと受けた仕事が、ドイツの製薬会社の広告撮影でした。

ドイツワールドカップまで活躍したドイツの英雄オリバーカーンをモデルに血圧を下げる、守るといったコンセプトでした。

撮影はピッチが凍る冬のミュンヘン、アリアンツスタジアムを3日間借り切り、エキストラのサポーターまで入れての大変な撮影でした。

現役を引退間際でしたが、横飛びのジャンプは3回までしかやらないという条件の為、日本から大量のリモートコントロール出来るカメラを持ち込んでの撮影となりました。厳寒の中、冬に撮影した写真が真夏の広告に使用されました。

(ウサインボルト最強伝説を創った男)

近年、世界陸上に私を行かせる唯一の被写体が、ボルトでした。

(2017年8月13日、ロンドン世界陸上は最終日を迎え最強伝説を作った男
ウサインボルトが引退した。)

2017年8月13日。今日。

本当は、私は16回目の世界陸上をロンドンで取材するはずでした。

第1回から皆勤賞の世界陸上の取材を初めて辞めました。

今までは、忙しさにかまけて自分の撮影した写真や、印刷物を眺める時間さえあまりありませんでした。

今回はじめて自分の過去を振り返り、写真などを眺めてみると、

日本人であること、出雲人であること。

ここ大社高校で過ごした3年間。

原点はここにあることが良く分かりました。

最後になりましたが、この男を最後にいたします。

この男もずっと私の被写体でした。

<END>